

~ある編集委員の留学記~

番外編：留学と家族

関屋大雄 Hiroo Sekiya 千葉大学

○ はじめに

留学を終え、あっという間に半年経ちました。留学していた時間が遠い昔のように思え、今振り返ってあのときもってああしておけば、など、少し後悔することもあります。それでも留学は自分にとって大きなステップアップにつながったと実感しています。

さて、日本に戻ってきた後、本誌編集作業にも復帰し、本号ワーク・ライフ・バランス小特集の編集チームに入りました。留学中、妻及び息子（出発当時2歳）は日本に残り、私は単身赴任生活を送っていました。本小特集に関わるにつき、妻に多大な負担をかけていたことを再認識し、改めて感謝しています。ということの記事にせよ、という指令を頂戴しました。

ここでは、留学記番外編として、私の留学中における、家族の様子を紹介します。ここに載せるのはあくまで一例（特例?）ではありますが、特に学生の方は将来の自分の姿をイメージしながらお読み頂ければ幸いです。

○ 家族の簡単な紹介

うちは妻と息子の三人家族です。妻は都内の某企業に勤務しており、文系の事務職です。保育施設不足のなか、幸運にも家の近くの認可保育園に子供を通わすことができています。お互いの両親は1時間くらいのところに住んでおり、何かあるとすぐに助けをもらえる環境にいます。共働き家庭として



留学出発時息子はまだ2歳でした

は、とても恵まれた環境にあると思います。

妻の会社は「働く女性」のための環境整備を率先して行っている会社で、小学校3年生までは子育てのための時短勤務が認められています。朝一番に私が子供を保育園へ送り（妻はその前に会社に出勤している）、夕方妻が迎えに行くという役割分担の下、毎日を過ごしています。

先に白状しますと、私は家事に全く関わっていません。言い訳はいろいろあるのですが、結果的には炊事、掃除、洗濯はすべて妻任せで、非常に申し訳なく思っています。その代わりと言っては何ですが、息子の教育は（一応プロだということで）私の担当になっています。平日の早朝は毎日ピアノの練習に付き合い、土・日曜日は主に私が子供の相手をし、外に連れて行きます。わずかな時間ではありますが、その間に妻には好きなことをしてもらおう。それで納得してもらっています。

○ 留学が決まって

私は家族みんなで留学に行きたい（行けるもの）と考えていました。さて、実際に私の留学が決まったとき、話を切り出してみたところ、妻の

「行ってらっしゃい」

の一言で全て決着が付きました。その理由は下記に挙げるようなものですが、全てがそのとおりで、まさに「取り付く島もなし」の一刀両断でした。

オハイオは寒い！

—ハワイや西海岸なら行ってもいいと言われてしまいました。今でも留学先は正解だと思っていますが、この件だけを考えるのであれば、留学先は家族の意見も聞いた方がいいかもしれません。

周りに日本人もいないし、私が大学に行っている間何もすることがない。

—実際に連れて行ったとしても、このことで頭を悩ましていたかもしれません。日本人に会うことはまずなかったです。周りに遊ぶところもほとんどなかったので。

仕事を続けたい。

—今の日本では一度仕事を辞めてしまうと、同様の職場に戻ることはまず無理ですので、こう言われてしまうと仕方ありません。

すっぱり切られた私ですが、最後のお願いで息子が2歳というので、

「子供が英語を身に付ける最高のチャンスだけど？」



ナイアガラの滝にて



教授との記念撮影

と頑張ってみました。それにも

「私は子供の頃、海外に住んだことがない。」

とこれも一刀両断。妻は英語がペラペラでした…。

こうなってはどうすることもできません。妻への説得は早々に諦め、一人で行くことを決意しました。

このことを周りの人に話すと、様々な反応がありました。多くの方から「かわいそうに」、「帰国したときに『おじさん』にならないように」と励ましとも慰めとも思える言葉を頂きました。一方、同じような共働き環境にある方、特に女性からは、「仕方ないね」、「当然でしょう」、という声が多かったような気がします。これ一つとってみても、私は働く女性の気持ちが全く分かっていないのかな、と感じたことを覚えています。

○ 留学中は

さすがにアメリカにいると私は家族に対して何もすることができません。できることは毎日日本時間に Skype で話をし、息子にお父さんの存在を忘れないようにしてもらおうくらいです。などというお父さんの必死の気持ちなど子供は知るはずもなく、出国して2か月も経つと

「もしもし？」

「お父さん?? バイバイ！」

とすぐに切られてしまったこともたびたびでした。

そんな私のほのぼのした家族との関わりとは大きく異なり、日本では私がいなくなったことで、妻に更なる負担を掛けることになりました。その中でワーク・ライフ・バランスを保つことは本当に大変だったと想像します。実際、子供が突然熱を出したときは大変そうでした（アメリカから様子を聞くことしかできなかったもので…）。当然保育園は休ませなければなりませんし、そのためには会社も休まなければなりません。多くの場合はどちらかの実家に子供を預けることになるのですが、それができない場合、妻はしばらく会社を休むこととなります。子供の病気を見越して、妻はそれなりの休暇を常に持っておく必要があります。実際に私の留学1年目

は休暇をほとんど使い切ってしまう、最後は子供が風邪をひかないように願わなければならない状態でした。

留学のルールにより、私はそう度々日本に戻ることはできません。そこで、二人は祝日と休暇を使って年に2、3回はアメリカまで会いに来てくれました。アメリカといっても広大です。例えば日本から見てハワイや西海岸とオハイオ州への飛行機の時間を比較すると、往復で一日分時間を損することになります。したがって、私の留学先であるデイトンまで来られたのは2年間で1回だけで、その他は西海岸やハワイに来てもらい、そこまで私も出掛ける形を取りました。それでも一度の旅行で最低3日の休暇は取らなければならず、妻の仕事に少なからずプレッシャーを掛けていたと思います。

そのような妻の協力があって、私は家族と会うことができ、精神的にも安定した状態で留学生活を送ることができました。

○ アメリカでの反応は

私の家族の状況は、もちろん留学先でも話題になります。多くの場面で、この状況を説明することになりました。ところが、その反応は一概に

「私が一人で来るのは当然」

というものでした。息子は寂しがるだろうね、とは言われましたが、2年後に帰ることが決まっておき、かつ妻が仕事を持っている状況では、単身赴任が当然、という反応がほとんどでした。文化が違うと言えばそれまでですが、このようなところでも日本とアメリカの違いを感じました。

さて、ここまでは、私のことばかり述べてきました。ワーク・ライフ・バランスとはそれですが、こちらで実際に見た（若い夫婦の）家族形態を幾つかを紹介したいと思います。

■ 同級生の学生結婚

留学記本編でも何度か出てきた学生結婚した夫婦の話です。同じ学科で、奥さんの方が私のいた研究室、旦那さんの方は別の研究室に所属していました。共に同学年で博士課程に進んでいたのですが、博士の取得は奥さんの方が早く、同時に大学のポストを500km離れたミシガン州で得ることがで



きました。悩んだそうですが、少なくとも旦那さんが博士を取得するまでは、別に暮らすことに決めたそうです。会いに行こうと思えば車で5時間、飛行機で1時間。その間は車の運転ができる旦那さんが度々奥さんのところに行くことになるでしょう。彼が博士号を取得するまではこの状態で、取得した後のことはそのとき考える、と言っていました。

■ 離れて暮らしていたが…

こちら留学記に何度か出てきた、同じ研究室の学生（インドからの留学生）の話です。彼は博士2年生のときに結婚しました。しかし、結婚当初から奥さんは約800km離れたミネアポリスで仕事をしており、結婚してからまだ一度も一緒に生活していません。少しでも一緒にいようと、ミネアポリスの会社にインターンシップで1か月出掛けるなど、いろいろ工夫をしていました（教授はおかんむりでしたが）。一方、奥さんがこちらに来ることは一度もありませんでした。奥さんは「休暇を取る休みには旅行に出かけたく、デイトンには来たくない!」とのこと。私のところと似ているかもしれません。彼も無事博士号を取得し、大学のポストも得ることができました。しかし、その場所は、更に奥さんと遠くなるペンシルバニア。しかし、躊躇なくそこへの就職を決め、もうしばらくは奥さんと別々に暮らすことを決めたそうです。最終目標はインドに帰り大学の先生になることなので、そのためのキャリアアップとしてもうしばらくは別々に過ごすことを我慢する、と言っていました。

■ 子どもが生まれ

これは、教授のお嬢さんのお話です。留学記第3回（no. 8, pp. 10-13 (2009)）でも少し紹介しましたが、アリゾナで旦那さんと出会い結婚。そして旦那さんの転勤（大学教員）に伴いマイアミに引っ越しました。博士を持っている彼女は引っ張られる形で、マイアミの会社に就職し、そして、私の留学2年目に無事女の子を出産しました。周りに身寄りがいないこともあり、出産前後の約半年の間、教授の奥さんはずっとマ



Air Force Museum @デイトンにて



ディズニーランド@アナハイムにて

イアミに出掛けていました。お嬢さんは少なくとも1年間は育児休暇を取り、仕事に戻るかどうかは子供の状態を見て決める、と言っていました。この話を聞いていると、親の助け、会社の支援は欠かせないという点で取り巻く環境は全く同じであると感じました。

本号の記事にも見られるように、日本でもその環境は整ってきているのだと思います。後は、それを利用することが当たり前となり、更に多様な家族の形を受け入れる社会の雰囲気ができあがるのが大事な気がします。

○ おわりに

「単身で留学に行ったことは当たり前」だ、とアメリカで感化されて帰国してきた私ですが、日本に帰ってくると「やっぱり普通ではなかったのかな」、と感じることが多々あります。自分のことなのにもかかわらず、周りの雰囲気が違うところも感じ方が変わるものなのか、と考えさせられました。ライフ・ワーク・バランスは夫婦、家族だけの問題でなく、両親、そして周りの理解があって初めてうまくいくものである、と本稿執筆を通じて感じました。

おかげさまで、私は無事「お父さん」のまま留学を終えることができました。2歳だった息子がすっかりお兄さんになっており、妻には本当に感謝しています。一方、海外出張などで、荷造りをしていると「またアメリカに行っちゃうの」と大泣きしてしまいます。いつも笑っていた息子ですが、相当寂しい思いをさせていたんだな、と思います。私の留学は妻、息子を含め、周りの人の理解なしには決して成功しなかったのだと再認識し、感謝の気持ちで一杯です。その上で留学に行けて本当に良かったと思っています。